

# 第76巻の巻頭にあたって

全国国立病院看護部長協議会 会長 近藤 才子

IRYO Vol.76 No. 1 (3) 2022

新年あけましておめでとうございます。

第76巻の発行に際しましてご挨拶申し上げます。

皆様におかれましては、この2年間はCOVID-19の世界的な感染拡大から各施設においてもCOVIDとの戦いの日々であり、苦労の連続であったのではないかと推察致します。一日も早く感染が収束し、通常の診療、生活ができるように祈るばかりです。

今回巻頭言という貴重な機会をいただきましたので、当協議会の活動について少し紹介させていただきます。

当協議会は、現在「全国国立病院看護部長協議会」と称します。昭和32年4月に発足した「総婦長研究会」に端を発し、昭和35年に国立病院療養所総看護婦長研究会規約を制定し会として組織化されました。その後昭和38年に「総婦長協議会」に名称を変更し、現在の礎が築かれました。寄稿にあたり、看護部長室の書棚に保管されていた「協議会のあゆみ」と表された重厚感あふれる立派な記念誌を改めて拝読させていただきました。昭和62年に「発足30周年」を記念して発行された記念誌です。記念誌の作成にあたっては、「過去30年の記録を地を這うように探し求め根気強く作業に取り組んだ」とありました。そこには協議会に携わってきた先輩方々の苦労の歴史が書かれていました。ある方の寄稿の中に「旧制度の看護教育を受けた私達は、戦後アメリカ進駐軍衛生部の指導によって、人間尊重を、病む人に生きるための援助をする看護の重要さを徹底して教えられ、ほんとうに眼から鱗の落ちる思いがしました。」と書かれており、その後、陸軍病院から国立に移管された病院で、看護管理者の奮闘する様子も伺えました。「アメリカ進駐軍」とはとても歴史を感じます。この教えは今では当たり前の倫理で

あり教育概念ですが、とても大切な事として先輩方は脈々と後輩に伝えてきたのだと実感しました。「総婦長研究会」設立の目的は、発足当時から「看護職員の質の向上と、業務内容及び看護職員の処遇改善」と書かれています。先輩方がこんなにも以前から次世代を担う看護師のために、看護の質向上や処遇改善について取り組まれてきたことを知り改めて敬意の念を抱きました。

現在の協議会は、看護管理者としての資質向上を図ると共に医療・看護の充実および施設の発展に寄与することを目的に活動しています。発足当時と同様に看護の質向上、処遇改善のための各関係機関への提言や、社会の変化に即応できるよう、管理者のあり方、看護部組織のあるべき姿、診療報酬改定に資する調査・研究、看護の質向上のための教育的な取り組みなどを行っています。

今はCOVID-19の収束がいつになるのかわからない災害レベルの社会情勢ですが、過去の先輩方が結核などの感染症と闘いながら困難を乗り越えてきた歴史があります。私達が看護師として、組織の中で活躍し信頼を得て仕事ができるのも、先輩方が築かれた礎があるからです。過去に感染症と闘ってきた先輩方に私達も負けてはいられません。

「協議会のあゆみ」の中の言葉は先輩方から、私達への応援メッセージのようにも感じました。また、過去から未来の看護を担う者への伝言であると思いました。そんな先輩方に恥じないように私達も次世代を担う看護師に胸を張ってバトンタッチができるよう、看護管理者として看護の質向上に尽力していきたいと思えます。

本誌「医療」共々看護部長協議会もどうぞよろしくお願い致します。